

確認した。

③まとめ 墓は見られなくなり、井戸は三泗川に近い遺跡の東側（1次調査、B・C地区）では作られるものの数は減り、西側では全く見られなくなる。基幹的な溝はⅡ期から継続して使用される。

(4) Ⅳ期（江戸時代）（第49図）

①時期 藤澤良祐氏の編年による登窯第1小期～第6小期までの時期。1次調査遺構変遷のⅡ期にあたる。1次調査ではⅡ期を一時期として取り扱っているが、ここではⅢ・Ⅳ期に分けて取り扱う。

②遺構

溝・流路 A地区でSD51、B地区でSD57・60、SZ58、C地区でSD76・78・86・92・95・114、D地区SD121を確認した。

前時期と同様にSD57・78が現畦畔沿いに延び、引き続きSD60も使用されている。また、SD121と一部重複するSD129もⅣ期まで使用されていた可能性がある。

土坑 B地区でSK65、C地区でSK72・98・106を確認した。1次調査はSK1、1基のみ確認した。

井戸 1次調査でSE9の1基のみ確認している。

柱穴他 1次調査南半部南端上層遺構で建物は建たないものの多数の柱穴を確認した。

③まとめ 井戸は1基のみである。B・C・D地区の土坑や溝、1次調査の上層で多数の柱穴が確認されており、最も新しい遺物である（307）が登窯第

5～6小期（18世紀～18世紀中頃）であり、その頃までは居住域であったと思われる。

(5) 全体のまとめ

里前遺跡の時期毎の様相を見ていくと、弥生時代前期から当遺跡周辺で生活が営まれ始めたことがわかる。Ⅰ期になっても調査区内に居住域は存在せず、Ⅰ期は集落のはずれにあたると思われる。Ⅱ期になると居住域が散在的に広がりを見せ、表層条里方向に一致する溝が作られる。少なくともこの時期以前に遺跡内の条里が施工されたと言える。また土器の出土点数も最も多く、遺跡内で画期となる時期である。Ⅲ期になると、集落は遺跡東側に偏りを見せ、Ⅳ期でも同様の様相を見せる。井戸は17世紀後半で廃絶するものの、土坑や溝は18世紀中頃までは確認できるため、その頃までは集落が営まれていたと考えられる。

また、地元での聞き取りでは、近世のいつ頃かに大水（洪水）が来て、犠牲者がでたため元屋敷（D地区付近と思われる）付近に五輪塔を建て、その後集落が現在の野田集落の方へ移動したと言う伝承もある。

今回の調査成果でも、18世紀中頃迄は集落が存続したものの、それ以後、調査地内では集落は営まなくなるという結果がでている。これは、上記の伝承とも一致する部分があり、地元伝承を考古学的に裏付けされたと言える。（酒井）

2 絵画土器について

里前遺跡から絵画らしい線刻のある土器が1点出土した。その土器は、4本の線を跳ね上げたように表現し、かつ3本の線で弓状に半弧を描く表現をしている。それは龍を線刻した絵画土器である可能性が高い。

龍を線刻した絵画土器の三重県内出土例は、原田恵理子氏が絵画・記号土器の集成^⑧で六大A遺跡から1点、堀町遺跡から1点を報告している。そして、絵画土器の出土事例から「Ⅰ期（山中併行期）に出現・盛行する。その後、Ⅲ期（廻間Ⅲ式併行期以降）まで残存する」また、「出土する遺跡は、かなり限定される」と指摘している。その後、六大A遺跡の報告書^⑧において穂積裕昌氏が4点（龍が崩れた可能

性のもの1点含む）の報告と龍と蛇線刻土器を中心に絵画・記号土器とその系譜について報告している。

また、龍の絵画土器について、岩本貴氏は全国的な集成^⑨を試みている。これによると、全国の出土例の約半数が奈良・大阪に集中し、これ以外滋賀・愛知・静岡に各1例、岡山に2例、福岡・宮崎に1例ある。そして、岩本氏の分類によると、頭部またはこれを意識した表現が認められるものを1類、1類を祖型として頭部表現が欠落したものを2類としている。また2類は、突起の発達が少なく胴部との区別が明瞭な2a類と、突起の長大化が進み、胴部と突起の大きさの区別が不明瞭な2b類に細分している。3類は、2類を祖型として胴部や突起を線によって

表現したもの。3類も2a類を祖型とし胴部の意識が明瞭な3a類と、2b類を祖型とし胴部意識が薄れ、突起の長大化が見られる3b類に細分している。4類は、1～3類の範疇外のものを一括している。そして龍の絵画に特徴的な事は、原画に近い物から簡略化が進み、形骸化したものが近畿から他地域に伝わったと指摘している。

では、近畿と東海の間地域である三重県内の出土事例も同じような変遷を辿るのか、岩本氏の分類を基に検討していきたい。

(1) 龍の形態と時期について（第50図）

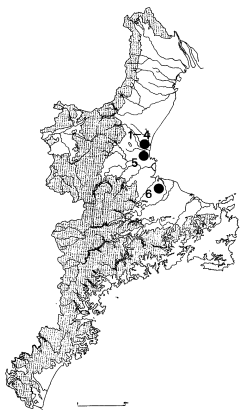
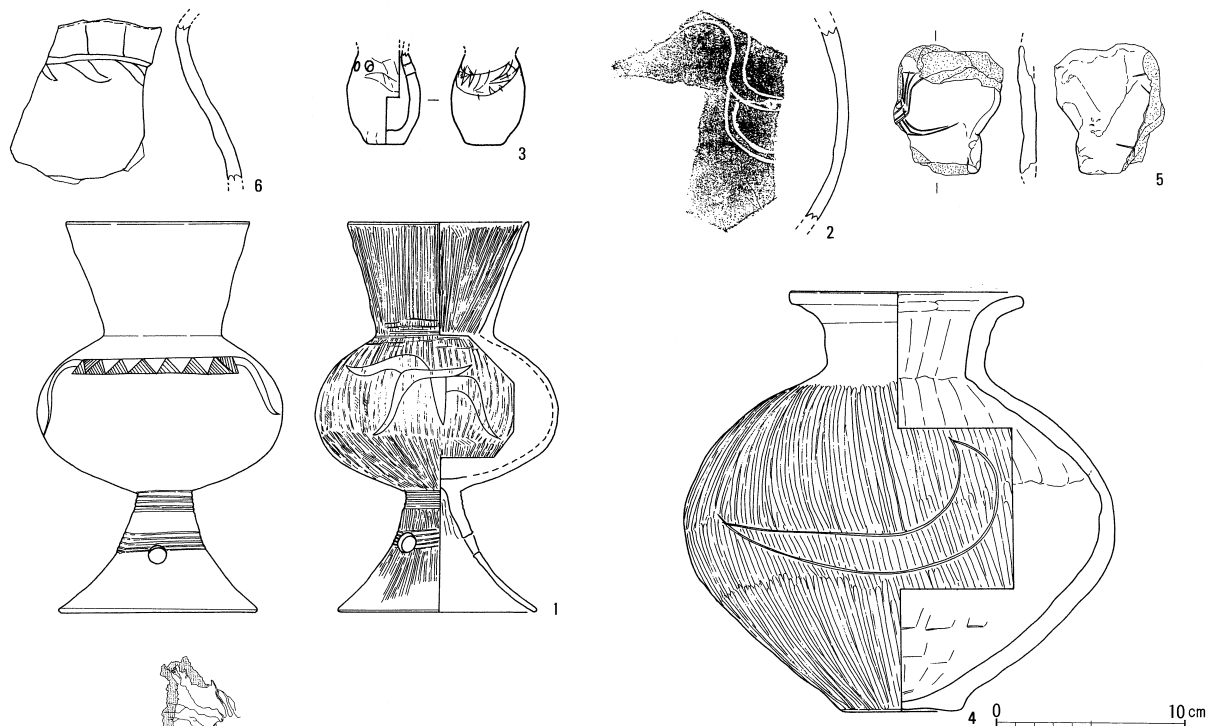
初めに、線刻の形態を見ていきたい。

六六A遺跡出土の龍は、①明確な頭部表現を欠き、崩れた龍と推定されるもの。脚付長頸壺の胴部に線

刻を施し、岩本分類の2b類に該当する。②形状が崩れ、突起を線表現化するもの。壺の胴部に線刻を施し、胴部と突起部と思われる線刻の大きさが不明瞭であり、2b類と思われる。③三日月状の沈線枠内に斜沈線を充填して上部に羽状のものを線刻したものと鋸歯文を充填したもので、龍の図案を線刻したもの。ミニチュア土器に線刻を施している。④広口壺の胴部に横長の三日月形の線刻を施し、龍が崩れた可能性があるものである。

里前遺跡出土の龍は、表面に胴部と突起を複数の線で表現し、裏面にも線表現が見られる。1本線で龍を表現していないため3類ではなく2類であろう。

堀町遺跡⁽¹⁾出土の龍は、壺の体部に蛇行する胴部にコブ状の突起の表現が見られる。一部分のため分類



遺跡名	所在地	器種	遺構	参考文献
1 六六A遺跡	津市大里窪田町字花村	脚付壺	SD1 土器群 1(Ⅲb層)	『一般国道23号中勢道路（8工区）建設事業に伴う六六A遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 2002年
2 六六A遺跡	津市大里窪田町字花村	壺	SD1 土器群 11(Ⅲb層)	『一般国道23号中勢道路（8工区）建設事業に伴う六六A遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 2002年
3 六六A遺跡	津市大里窪田町字花村	ミニチュア土器	SD1 土器群 45(Ⅲb層)	『一般国道23号中勢道路（8工区）建設事業に伴う六六A遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 2002年
4 六六A遺跡	津市大里窪田町字花村	広口壺	SD1 Ⅲb層	『一般国道23号中勢道路（8工区）建設事業に伴う六六A遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 2002年
5 里前遺跡	津市野田字里前	—	SZ55	『一般国道23号中勢道路（8工区）建設事業に伴う六六A遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 2002年
6 堀町遺跡	松阪市朝田町字堀町他	壺	SZ399	『一般国道42号松阪・多気バイパス建設地内埋蔵文化財発掘調査報告VII 堀町遺跡』三重県埋蔵文化財センター 2000年

第50図 絵画土器実測図・位置図・一覧表（1：4）

は不明だが、恐らく2類と思われる。

次に同一遺構内の共伴する土器から絵画土器の時期を見ていく。

六大A遺跡は、SD1出土で、弥生時代後期から古墳時代の大溝であるため共伴する土器の時期幅は広い。土器群毎で見ると、おおよそ山中式から欠山式の時期に当たる。また、脚付壺は山中式であると思われる。

里前遺跡は、SZ55出土で、1点のみ山中式の高杯が出土しているものの、出土土器の大部分は欠山式であり、欠山式或いはやや下の時期のものであると思われる。

堀町遺跡は、SZ399出土で、遺跡自体の存続は山中式までであり、この土器も山中式併行期のものであろう。

(2) まとめ

以上のように、龍の絵画土器は県内で6例出土している。

岩本氏の集成によると、龍の絵画土器の分布は奈良・大阪に集中し、次いで岡山に多い。今回の事例では、奈良・大阪に集中するものの、6例の東の三重と5例の西の岡山と出土例が多い事が注目される。

3 鉄製煮沸具について

中世の煮沸具には、土師器製、石製、鉄製のものがあるが、このうち中世鉄製煮沸具は三重県内でわずか9点余りしか出土していない⁽⁴²⁾（第51図）。その種類は、鍋が岩出地区内遺跡群⁽⁴³⁾から3点、多気遺跡群⁽⁴⁴⁾から2点、斎宮跡から1点の計7点、鍋の弦と考えられるものが三宅西条城跡⁽⁴⁵⁾から1点、羽釜と思われるものが阿形遺跡⁽⁴⁷⁾から1点である。残存状態は、残存度が良くて口縁部で1／5程である。

まず鉄製の煮沸具が確認されている5遺跡について概観する。岩出地区遺跡群は、伊勢神宮の祭主、大中臣氏の居館に関わる遺跡である。多気遺跡群は、北畠氏の拠点が置かれた遺跡である。斎宮跡や阿形遺跡は、数多くの掘立柱建物が確認された大規模な集落遺跡である。というようにいずれも大規模な中世集落や城館が営まれていた性格の遺跡である。里前遺跡でも多数の墨書土器が出土し、川崎志乃氏は「年貢集配に関する遺跡」としている。このような

そして、龍の絵画土器が出土する遺跡はいずれも永続的大規模集落が営まれた、それぞれの地域を代表するような遺跡が多く見られる。里前遺跡では、現在のところ、同時期の遺構は僅かで大規模な集落とは言えない。しかし、里前遺跡の龍の線刻が出土したSZ55は環濠の可能性があり、津市野田では、野田銅鐸（突線紐式三遠式銅鐸）が出土し、地理的に近い神戸から神戸銅鐸も出土している。これらに隣接することから、付近に大規模な集落が存在する可能性が高い。

また岩本氏は、龍の絵画土器は畿内で出現したと指摘し、県内の絵画土器の出現時期について、原田氏は山中併行期と指摘している。今回の検討で、県内の出土事例では初現期の頭部を意識した表現を持つ龍は見当たらなかった。そして、龍の分類はすべて岩本分類2類の時期に相当し、その前後関係は、共伴する土器から堀町遺跡出土龍が最も古く、次いで六大A遺跡、里前遺跡という結果を得た。以上の事から県内の龍の絵画土器出現時期は、概ね山中式併行期に当たり、欠山式併行期或いはやや下の時期まで存在すると思われる。（酒井）

遺跡では、鉄製の煮沸具が用いられていたことは確実である。

しかし、鉄製の煮沸具の使用は、上記の大集落や城館などで限定的に行われていたと断定できるのであろうか。土師器類が大量生産によるものであり、耐久性の低さから多量に消費されているのに対し、鉄製煮沸具は破損しても修繕可能であり、再利用されるため、廃棄されるものが絶対的に少ないこと。その形状から口縁部や齔部、弦が出土しないと認識されにくいことなどが、確認例を少なくしているのかもしれない。

また、本来出土しているにもかかわらず、発掘調査報告書作成中の遺物選別時に、調査担当者の不見識により一瞥すらされずに打ち捨てられているものがある可能性がある。鉄製煮沸具に関して一定の意識のある特定の調査担当者がかかわった遺跡で、鉄製煮沸具が多く出土していることも気になることで